

第9回新潟食道・胃癌研究会

日時 平成19年11月10日(土)
午後2時～
会場 新潟ユニゾンプラザ
4階 大会議室

I. 一般演題

1 乳癌原発の転移性食道癌の1例

坂本 薫・小杉 伸一・松本 淳
神田 達夫・畠山 勝義
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科

症例は58歳、女性。主訴は嚥下障害。高度進行乳癌に対し、術前化学療法施行後、2004年乳房切除術を行い、術後化学療法中であった。2007年6月頃より嚥下困難を自覚し、食道造影にて、食道[Mt]に狭窄を認め、同年7月精査目的に当科入院となった。内視鏡所見では、切歯列より32cmに全周性狭窄を認め、ファイバーの通過は不可であったが、粘膜面に異常なく、生検にて悪性所見を認めなかった。CTにて中部食道に全周性の壁肥厚と、左胸水の貯留を認め、PETにて食道腫瘍部及び左胸水部に集積を認めた。胸水穿刺にて、以前の乳癌と同様の病理学的所見を認め、乳癌原発の転移性食道癌と診断した。治療として、化学療法・タキソール®を行い無効であったが、ナベルピン®投与にて、臨床症状及び画像所見共に著明な改善を認めた。乳癌原発の転移性食道癌は非常に稀であり、また本例は化学療法が有効であった、興味深い症例と思われ報告した。

2 腹腔鏡下食道切除術(VATS-E)の工夫と成績

— 導入から5年を経て —

桑原 史郎・片柳 憲雄・狩俣 弘幸
野上 仁・横山 直行・山崎 俊幸
大谷 哲也・斉藤 英樹

新潟市民病院外科

【目的・方法】当科では2002年10月よりVATS-Eを導入し現在までに53例に施行した。これまでに行ってきたVATS-E施行時の工夫と臨床成績をVATS-E導入直前までの開胸食道切除群と比較検討した。

【結果】

現在までの工夫：

現在の適応はT3N2までである。肺の術野への侵入の克服のため手術台のrotateをした。気管の圧迫に対し気管鉤(11例目)、ユニベントチューブによる分離肺換気(15例目)を順次導入していった。さらに2モニター画面とし、45度斜視鏡を用いるようにした(19例目)。また、組織の繊細な把持のための腹腔鏡用鑷子を導入した。手技は30例程度でほぼ定型化された。手術時間、出血量からみた明らかな習熟曲線は認められなかったが、これは導入当初は容易な症例から開始し、順次適応を拡張したためと考えている。VATS-Eの成績：

VATS-E群(n=53)、開胸群(n=41)の胸部操作時間、出血量、縦隔郭清リンパ節個数の中央値は210 vs 129min (p<0.05), 110 vs 192ml (p<0.05), 16 vs 13個(N.S.)であった。また、人工呼吸機管理は1 vs 2日(N.S.)、再挿管は3例(6%) vs 8例(19%) (p<0.05)であり、術後肺合併症、反回神経麻痺、術後入院期間は7(13%) vs 17例(41%) (p<0.05), 18(34%) vs 10例(24%) (N.S.), 20 vs 25日 (p<0.05)であった。R0症例(n=50)のうち11例に再発(血行性6例、頸部リンパ節3例、縦隔リンパ節1例、他1例)を認め、このうち4例が原病死した(観察期間中央値388日)。

【結語】種々の工夫を加えながらVATS-Eを53例に施行した。VATS-Eの臨床成績は多くの

利点を有していた。短期予後では血行性転移が多くを占めていた。

3 進行食道癌に対する放射線治療成績

末山 博男・福田 貴徳・藤原 敬人*
平野 正明*・丸山 正樹*・本田 譲*
堂森 浩二*・佐藤 俊大*
県立中央病院放射線治療科
同 内科*

当科では進行食道癌に対して低容量 CDDP & 5-FU に 1 日 2 回照射 (AHF) を行っており、今回週的に治療成績を検討した。対象は 1999 年 8 月から 2006 年 3 月まで AHF 土化療を施行した 73 例で、男女比 66 : 7、年齢中央値 70 歳、腫瘍部位は Ce 15, Ut 13, Mt 39, Lt 8, TNM 分類では T1 : T2 : T3 : T4 = 1 : 6 : 39 : 27, N0 : N1 = 42 : 31, M0 : M1a = 64 : 9, 病期は II A 27, II B 1, III 36, IV A 9, 化療併用が 69 例、照射単独が 4 例であった。照射は完遂したが、化療の中止を 12 例に認めた。治療効果は CR 40 例, PR 23 例で奏効率 86 % であった。粗生存率は 2・5 年が 49・21 % であった。再発様式は、局所と遠隔が半々であった。急性期有害事象は食道炎が高率で、次いで白血球減少を認めた。治療成績改善のためには、今後新たな戦略が必要である。

4 TS-1/CDDP 治療が奏功した食道浸潤胃癌の 1 例

山田 明・阿部 要一・摺木 陽久*
佐藤 秀一*・上野 亜矢*
木戸病院外科
同 内科*

症例は 60 歳代男性である。1 ヶ月前より嚥下障害が出現し内科受診し、上部消化管内視鏡検査で食道浸潤を伴う 9cm 長の 2 型胃癌を認めた。生検で por1, CT, 注腸諸検査にて T3N3 (No. 16a2) H0 P0 M0 Stage IV の診断で TS-1/CDDP 少量分割投与を 2 コース行った。1 クール施行時より嚥下障害は軽快し、CT にても主病巣とリンパ節転

移巣の縮小を認めた。1 コース後、内視鏡にては CR, CT にてリンパ節転移 PR の診断であったが、2 コース終了時にはいずれも CR 所見であった。初回化学療法より 24 週後に胃全摘、D2 を行った。病理組織学的には主病巣 CR, n (一) H0 P0 CY0 M0 であった。術後経過良好にて 13 病日退院し現在経過観察中である。

5 TS-1 + CDDP による化学療法が奏功した進行胃癌の 1 例

伏木 麻恵・植木 匡・若桑 隆二
石塚 大・多々 孝
刈羽郡総合病院外科

症例は 73 歳、女性。

【現病歴】倦怠感を主訴に当院内科受診し Hb 6.0 であった。胃潰瘍の診断で他院治療中のため、鉄欠乏性貧血として加療した。2 か月後に心窩部痛と食欲低下が出現し、上部消化管内視鏡施行し type 2 の胃癌を認めた。

【治療経過】腫瘍マーカーの CA72-4 が 76.4 U/mL と上昇していた。腹部 CT にて傍大動脈リンパ節転移があった。Stage IV のため、TS-1 80 mg/body (2 週投与 1 週休薬) + CDDP 20mg (day 1 投与) の抗癌剤治療の方針となった。3 コース施行後に傍大動脈リンパ節転移の著明な縮小、原発巣の縮小および CA15-3 の正常化を認めた。治療開始 3 月後に幽門側胃切除術を施行した。壊死に陥った傍大動脈リンパ節は切除できなかった。摘出標本の病理診断は sm2, por1 = tub1, ly0, v0, N+ (No.3, No.6) であった。術後治療は TS-1 単独 (4 週投与 2 週休薬) 投与とし、診断日より 1 年 2 カ月目であるが無症状にて外来通院中である。

【結語】抗癌剤治療の進歩により、癌の縮小が得られた後に胃切除をした貴重な 1 例であると思われる。